

恐怖の鎌倉

丹・吉

『待てッ……』大喝一聲

數間先を自動車は走る

棍棒大のステッキは風を切つて飛ぶ

過またず命中する

偉駄天の如く後を追ふ足の速い物凄い男

巧みに飛び乗る

車は止る

物凄い男はボツリ／＼ゴテる

ステッキは絶えず活躍する

やうやくケリの付いて逃れる車は

見違える程見憎く傷手を負つて雲を霞

物凄い男は憎らしいほど
ここもなけにクスツゝと笑ふ

×

×

×

鎌倉小町の一角に巢喰ふ

物凄い男とその一黨

常に街頭に出て茶目る

ブルの巢鎌倉の恐怖

茶目ごたえありきと喜びしも

それもこれも今は昔の夢か

物凄かりし男は歸らず

されどその一黨は

數に於て其の行爲に於て

量多きを想へ

大杉君と僕

武田傳二郎

僕が大杉君と始めて會つたのは、大正七年八月、大杉君が野枝さんの郷里から歸京の途、梅田驛前の旅館に、マコちゃんも三人で留つて居た時、岩出、松浦、安部君等と、僕も會ひに行つた、恰も、………の日で、岩出君の家で、夕飯を食つた後散歩に出掛けやうと云ふので、外へ出た。所が、大勢の人がわつしよく走るので、何んだらうか聞いて見る、………。コワイものみたして、一つ行つて見やうじゃないか、難波方面へ出掛た。………。僕は目が悪いので終

までゐた、まらず、皆んな別れて、日本橋の安部の家まで来る、………。人々の話を聞いて、少々アブないと思つたので、家へ歸る積りで、外へ出て見る、日本橋を北から南へ、………。

………こんな有様の時に大杉君等は、何をやつてゐたのか知らないが、翌日、機を見るに敏な彼は、尾行をまいて東京へ歸つてしまつた、………。

………當時の新聞に依るに、………。事實であつたか、さうかは、未だに僕の疑問としてゐる所である。………。

………その翌年だつたか、東京で社會問題の夏期講習會があつた時、大阪からは、僕と岩出君と森田君と三人で出掛て行つた。東京に着て堺利彦君の隣の内へ留つて、その足で直ぐに大杉君の尾行毆打事件の公判を聞きに行つた。荒畑君を初め猛者連百人

………程裁判所へ押掛けて行て居た。僕は時間が明乎りしなかつたので、まご／＼してゐる内に、裁判は開かれてしまつた。法廷はスバイで満員だ、猛者連は承知せず、怒叫する、遂に裁判は一時中止になつて、全部を法廷から出し、改めて公判を開いた、今度は吾々同志で大部分を、占てしまふことが出来た。………。山崎君の有名な辯論のあつたのもこの時だつたと思ふ。………。

………社會主義同盟の第一回の大會があつた時、僕も上京した、鎌倉の大杉君の宅へ着いた時は、丁度大會の前日であつて、同志の茶話會が開られて居た。ボツ／＼五分間演説が初まつてゐた。僕も何か喋舌らないかと言はれたので、兄九平が在社會當時、僕が彫刻業の監札を玉造署へ取りに行つてもらつた話を中途までしかける、臨官の鎌倉署の署長が中止に來た、する、大杉君が、署長を睨んで、『馬鹿！事實を話してゐるんじゃないか！』と怒なりつけた。それをきつかけに、………。

………到々皆んな檢束されてしまつた。所が出舎警察へ一時に、四五十名も引張つたのだが、何れも一流の猛者ばかりだつたので上を下への大騒ぎだつた。三時頃二三の人を残して、大部分の人を出した。出た連中は青年會館へ行つた連中、服部洋服店へ行つた人々、三派に別れた。僕は夕方まで残されて、村木君に迎いに來てもらつて歸つた。その日大杉君は、風邪で餘程熱があるので、大會に行くのを止めて、床に就てゐたが、矢つ張り我慢が出来ず、僕と二人で、無理に大會の會場へ出掛けした。その時、大杉君は、『君は僕の傍を離れない様についてゐたまへ、警察官が何か言へば、僕の看護に着いてゐるのだと言へばよいから』と約束はいいのだが、會場の前で、覆面の大杉君が、大杉だ、大杉だ、直ぐつかまつてしまふし、僕は、僕でお前は大阪の武田だらうで、共に錦署へ引張られた。錦署へ行つて見る、ゐるわ、ゐるわ、岩佐、堺、その他百人位もゐて大満員であつた、その内、ほつ／＼白動車で、二十人位宛、警視廳へ送られた。その連中は随分警視廳で、………。

………、收監された、大串君のやられたのもこの時であつた。

………最後に會つたのは、全國労働組合の總聯合大會が、大阪天王寺であつた時、大杉君が、檢束されて、高津署へ廻つて來た、檢束が解けて歸る時、僕の宅へ寄る筈だつたが、特高が許さなかつたので署の前から自動車で、梅田へ行くのを見送つた。それが最後であつた。

………僕は餘り大杉君と行動を共にしなかつたが僕にまつては親しみ易く、忘る、ここの出來ぬ人であつた。

………を騒がし、新聞屋を喜ばし、同志間では、何と云はれても、主義一貫、大杉君の如きは先づ、あるまいと思ふ。

大杉の個性教育

和田久太郎

▲大杉は、色の黒い、がつしりまして脊の高い、眼玉の特別に大きい、脂濃いものの好きな、精力旺盛な、口中の臭い男だった。

▲大杉は極めて個性の強い、従つて或場合は極めて傲慢な男だった。それだけに又、他の個性のない人間をケイベツした。

▲僕が『労働運動』の記事を書き悩んでゐるこゝ、まア休んで茶でも飲めよ、と言ひながら、大杉はよくそんな、時、雑談を、旺んにやる。そして、僕が雑談に調子づいて何んかを喋つてゐるこゝ、彼は急に起ち上つて『よしその事を書くんだ。君が今談した事を、その氣持ちのまゝで書くんだ。さうすれば直ぐ書ける。そちらの書き誤りは破つちまへ！』といふ。そして、ぶいゝ自分は仕事を始める。『だつて、まゝまつちや、書けないよ、最少しよく考へてー』と云ふこゝ、『そんな馬鹿をいふな。自分は學者じゃないんだ、自分は労働者だ。叫びながら書くんだ。間違つた事を言つたつて何んだつていゝから、氣持ちのまゝ、を書くんだ。君がいま、一寸喋つた事は面白いよ。喋つた事が、書けないつて法があるか。笑はれるかもしれないなんて、卑怯な事を考へるなッ』怒鳴る怒喝られて僕も癪だから『畜生！』と心で叫びながら書きなぐつてしまふ。すると大杉はそれを見て『それ見ろ、こんなに立派に書けたぢやないか』といつてニコ／＼笑ひ乍から、文章なんか一寸手を入れてくれる。で、僕も嬉しくなつて、だんだん勇氣が出てくる。自信もついてくる。

大杉は決して説いて教へなかつた。自發を促してくれた。自分で自分の芽が育つて行く様にしてくれた。萬事、こゝにいふ調子で僕を教育してくれた。

▲或時 大杉は僕の小さな原稿を見て、『駄目だ！俺の言葉を真似ちや駄目だ。自分の調子で書け』と言つて、ピリツヒ引裂いてしまつた。僕はその時怒つて大いに議論した。そして載せさせた。が、大杉のこの心は、ほんゝにしみじみ嬉しかつた。彼は、それほゞ個性を尊重した男だ。

一九二五、八、五

夢さめて魔子を想ふ歌

赤石久太

筑紫瀉沙吹く風にくろぐろミ

染みて唱へる魔子を夢みき

海を好み唱ふを好む快活の

魔子の友なれ筑紫海鳥

幼けなき妹の二人ミ父母の墓石の

對へる海に今日も唱ふか

逗子の海鎌倉の海手をつれし

父母はいまさねその西の海

(八月五日)

大杉の憶ひ出

安 谷 寛 一

「大杉君は遠目に見て居る者からは恐はがられ、近づいた人から親しまれた人はない。大杉君は強い性格のごこかに大きな魅力があつた。そして一度びこの力に觸れた人は、時には大杉君に不平や不満を云ひつゝも、結局は大杉君を離れまいとした」は大杉をして「ゴマの蠅」ミカ「山カン」ミカ罵倒せしめた程の山川均の言葉だ。ところが私も其の魅力ミカ云ふ奴に引きつけられたのかさうか知らぬが、さうも離れたくなかつた。大體が大杉の運動ミ云ふものに大して關係もなく、興味も持てなかつた私にミつては、大杉の主義運動上のごてくさや矛盾に就いての不平不満を持つ世話もなく、ただ人間ミとしての深い親しみが私ミ彼ミを結びつけてゐただけの事だ。大杉の旗下であり、關西探題であり、昨秋の福田事件で公判中の和田久太郎は「安谷は良い事でも悪い事でも、大杉のする事なら良いのだから」ミ云つて居たさうだが、全く人間ミして好きな者、親しみの持てるものとする事の方が、「子供ミいふものは、犬のやうに可愛いものかしら？」ミ云ふ人間らしくもない荒畑なんかの事より遙かに氣持ちが良いに決つてゐる。全く子供ミ云ふものが犬より可愛いものかさうか分らぬ様な野郎には人間の氣持ぢなにか分る筈がないのだから、だが、そんな理屈もさうでも良い、ただ好きだから好きで、好きな者のする事なら、強いて多少勝手な解釋を下しても、その味方をしたいミ云ふのが、私の少々間違つたミこで、封建的だなんて云はれる所以なんだがそれも一向だれの前でも恥ぢない。

大杉の運動に就いて餘り注意しなかつた私の思ひ出は、本當に個人ミとしての、家族的な交りの思ひ出で、労働運動ミか無政府主義運動ミかを主にして大杉を考へる人達には極めて興味の無いものだミ云ふ事を先づ斷つてをかなければならぬ。

そも私が大杉榮の名を初めて知つたのは、たしか大正元年の暮頃？、まだ出かかりの『近代思想』を通じてのこゝであり、文通を始めたのは、同じ四年から五年にかけて大杉が佛蘭西文學研究會を開いてゐた時の事であつた。それも別段無政府主義

者ミしての大杉ミ交際しようミ思つたのではなく、私が其頃出してゐた「リベリユウル・ルウジュ」ミ云ふ佛蘭西語雜誌に、大杉がその會で使ふ材料をこり入れようミ思つて、やはり其頃「青テール」ミ云ふ短歌雜誌を出してゐた西村陽吉に紹介されて初めて手紙を送つた。それで材料の本を送つてくれたり、私からも材料の作製を頼まれて送つたりして、かなり繁々手紙のやりこりをした。それから間もなく、それはやはり大正五年なんだらうが、保子さんミの家を出たミ見えて、同志達にもないしよだミか云つて、福四萬館ミ云ふ下宿屋から手紙をよこしたりしたが、そうかうするうちに葉山日陰茶屋の刃傷一件を新聞で知つた。その後は一向通信もなにもしなかつたが『文明批評』ミか『労働新聞』ミかはか、さす送つてくれた。

初めて會つたのは、の年、その 眞最中の八月十三日の晩であつた。大阪の岩出の家に當分ゐるから遊びに来てくれ、ミ云つて來たので、十三日の晩、當時「みなみ新聞」を出してゐた岩出金次郎君の宅を訪ねるミ、大杉は急に東京に立つ事になつて出かけたミ云ふので、私は大阪驛に驅けつけて會つた。あらい浴衣にヘルメットを着て、腰にタオルをブラさけてゐた。九州からの歸りで、もう少し遊んで行きたいのだが東京の同志が皆んな檢束されたので歸つて來いミ云ふものだから、ミ云ふ様な事を云つてゐた。初めて會つたのだが、足かけ七八年間の文通で、すっかり十年の知己のやうに思つた。その時ブラットホームで、岩出君のほか、死んだ逸見直造君や、今東京で印刷工をしてゐる山鹿泰二君等を紹介してくれた。

それから二年目の大正九年の春 最後の監獄行きをすませた許りの大杉が、久太ミマコの三人連れで、勤め先きの居留地に私を訪ねて來た。なんでも東京を抜け出して横濱から船で神戸に着いた位いで、金がないから宿の世話をしてくれミ云ふのだつた。そこで早速宿屋に案内して一緒に晩飯を食つたが、「同じ泊るのなら君の家にいかう、なにふさんが無くて良いし、食ふものがなけりやパンでも買つて行つて食ふミしよう。友達の家の方が不自由でも温みがある様に思へるからなあ」ミ大杉が云ひ出したので、家内の留守になつてゐる二階借りの私の棲居に連れてかへつた。そこで豫定通りにパンを焼いて食つたり時には牛肉食ひに出かけたりしながら、二日ほぎを過した。

その時、大杉、マコ、進君、久太それから私の五人連れで賀川豊彦を訪問した。目的はフアブルの英譯ものを借りる事にあつたのだが、賀川が自分の數學の公式を憶へてゐるミか、馬の進化の各階梯の學名をミこつゝ憶へてゐるミか云ひ出したの

が原で『君の様な馬鹿はない』と云つて大杉はさん／＼罵倒した。それは全く賀川にも細君にも氣の毒なほどだった。そのほかの話は賀川が『改造』に書いた様なことだったが、恐らく大杉はその後賀川を訪ねた様な事はあるまい。

『改造』に宮島君が、大杉の物覚えのよくない事を書いてゐたが、大杉はそれをまた自慢にしてゐたようでもあつた。その時も『僕はなんでも忘れよう忘れよう努力めるのだ。おかげで近頃は春陽堂の電話番号さへ覚えてゐられぬやうになつた』とも云つてゐたが、その頃の春陽堂は大杉の飯櫃のやうなもので、電話は京橋の五一三かつて、今でも私は覚えてゐる程覚え具合の良いものだった。

その翌月、私は駒込曙町の労働運動社を訪ねたが、大杉は『金がなくて御馳走が出来ぬから大石の所にでも行つて頼まう』と云つて雨の中を大石七分君の巢鴨の家に連れて行つてくれた。

そのうち鎌倉では一ヶ月許りも世話になり、神戸に歸つてからも度々會ひに行つた。また大阪や神戸に來た時は必ず會つて一緒に飲んだり食つたりした。がこんな事をいつまで云つてゐても一向面白くない。いつ會つた、いつ御馳走になつた、と云ふだけでは、私にまつてこそ、その頃のさま／＼の情景が、私の中に甦つて、極めてなつかしい思い出なんだが、他人にはなんの興味も起らう筈がない。と云ふのは、なんしろ私の話には、労働運動と云ふチャンバラバラが少しも入らないからだ。

□

□

全く、十年の交りを持つ私は、大杉と無政府主義と労働運動に就いて話し合つた事は、ただの一度もなかつた。もし大杉に、無政府主義者としての一面と、昆虫研究者としての一面とがあつたとしたら、私は其の後の友達でもあつたのだらう。大杉はいつも私の生活の平穩であることを祈つてくれた。彼がフランスに旅立つ年の春、信州路の旅商人の群から離れて逗子の家をたづねた時、なにか良い仕事があるまいかと相談してゐたら、間もなく須磨の家に手紙が着いて、或る本屋から通俗科學の叢書を請合つたから、その原書は佛文で十五六冊のもので、英譯が三四冊ある、その英譯は伊藤やその他の人にやらせて、佛文の分を君に全部任せるから、だが君一人では信用出来ぬから妻子を連れて逗子まで押しかけて來てくれ、その上で家も探そう。と云つて來た。その冒頭には、『僕は君の其後の生活に就いては窃かに心配してゐたのだ。君が今のやうになつたのに多少の責任を感じるやうな氣もして。』

『君が今の荒んだ生活に、氣である人では仕方がないと思つた。』

『しかし君がさうでもないやうなのを見て喜んだ。そして是非共君が方向轉廻しようとするのをお手傳をしなければならぬと思つた。』これでもつて、主義者と云ふ者の仲間ですつて評判の良くない私を、彼は別の方面の友達として見てゐたのだと考へられる。で、彼は私には至つて親切であつた。然し任されることと云ふ翻譯仕事に、急に自信がなくなつたやうな氣がして斷つた。するこ

『翻譯に自信がないと恐れる事はない。それに翻譯の稽古は翻譯をする事だ』と云つて元氣づけてくれた。が結局やつぱり、そのうちの一冊だけを引きうけて全部の責任から脱れた。

□

□

柏木への轉居のしらせをうけてから、間もなく大震災がやつて來た。大杉等の身の上を案じて二回ばかり見舞狀を出したがそれが着かう筈はなかつた。そして九月の十七、八日頃からの蒸し暑さでねむられぬ幾晩目かの、しかも眞夜中、私の家の前で自動車が進んで、門を叩く音がした。私は急に不安に襲はれながら門を開けるこ、それは大阪毎日新聞の記者で、號外を示しながら、大杉夫妻の筆蹟が借りないことと云ふのだつた。號外には明かに『甘粕憲兵大尉留置中の大杉榮を刺殺す』とあつた私はその夜の明けるまで、彼の無念そうな死相を想ひ浮かべては泣いた。それから早や二年になる。然し毎日幾度か彼等を憶ひ出さぬ時はない。するこ彼等の生きた姿がま／＼私の前に現れる。私は幾度も幾度も同じことを繰り返して憶ひ出す。

彼はよく、本當に良い友達を一人得るまでは何に事もある、とよく云つた。天王寺の赤黒合戦の日、そら久太がつかつた、こんな近藤が交番に引き込まれたことと云ふ中を、私は彼は全るで關係もないそんな話をしながらゾロ／＼歩いてゐた。私の翻譯仕事の話のあとで彼は、なん／＼かして田舎に入つて昆虫の研究をしたいと思ふんだがね、と云つた。私達はそれに就いてゐる／＼田園生活の話を交した。が彼がフランスに旅立つたこと知つて、不思議だと思つた。するこ又、フランスから歸つて朝の特急で東京にかへる時、神戸驛のプラットホームで、東京にかへたら、今の社を解散したいと思つてゐる、都合で來ないか、と云つたそれが彼の最後の言葉だった。私は彼が勞運社を解散してなにをしようとするのだらうかと／＼考へて見た。見た。

大杉等が死んでから聞いたことだが、大杉はフランスからかへつてから、文藝雜誌を出そうじやないか、と宮島君に話した。

このことだし、野枝さんは伯母ミか父親ミかに、心配しなくてももう四五五年の間だから、ミ云つてゐたさうだ。私はその、勞運社解散・昆虫研究、文藝雜誌・四五年の間、それにフランスから持つてかへつた書物が大部分自然科学ミ文藝に關するもののみであることなきを思ひ合せて、大杉が未來ある無政府主義者であつたかさうか大に疑はなければならぬ。甘粕が折角ビクビクモノで殺した大杉は未來ある革命家ではなくて穩和な昆虫研究書の讀み手であつたのかも知れぬ。一向その邊のことは分らぬが、親しみ深い大杉の追憶は今も私の中を往來してやまない。彼がなに主義者であらうミ私にはかゝわりのないことだ。

須磨の宿で、フランス行の感想をミ、新聞記者にせがまれて、大杉は『そのたびに懐かしからん晩酌の味を覚えしバリの牢屋』ミ書いたが、そのバリの思ひ出に懐かしみながら晩酌に親しむ日の餘りに短かつたことは返す／＼も残念であつた。

マ コ よ

ゲン ニ イ

僕は腸絶つ思ひ。

ババのよく云つた戯言に、

俺が死んでも

ゲンニイ居れば

マコは安心

大きくなる、ミ、

マコよ、今日から好い小父様が、

ババの代りにお前ミ遊ぶ。

マコよ、獨りで泣くのはおよし、

小さいお胸に大きな腦み、

秘めて憂ひの子にならぬよう、

僕も一緒に泣かしておくれ。

マコよ 獨りで泣くのはおよし、
僕も一緒に泣かしておくれ、
ババに好く似た大きなお目に、
露を宿して歎歎く時は、
僕も一緒に泣かしてをくれ。
ババミママが歸らぬ事を、
僕が寢床で話したをりも、
マコよ、お前は頷くばかり、
涙見せない可憐さまに、

初めて知つた頃のこと

和田信義

僕が初めて大杉君を知つたのは、例の日陰茶屋一件以來のことだ。其の當時の大杉君は何ミいつてもいろ／＼の意味から君の失意時代ミも云ふことが出来る。最初に逢つたのは龜戸の家でだ。其の時分の僕は東京の或る郵便局の事務員をしながら未來の文豪を夢みてゐたり、また熱烈な誰れにも負けないほどの革命家を夢想してたり極めてたよりない者だつた。其のかたはらまた猛烈な苦學もしてゐたが。

當時龜戸の家では大杉君は伊藤野枝、和田久太郎、久板卯之助君等ミ一緒に、最初の勞働新聞を發刊かけてゐた。其の一號だか二號だか今はもう忘れたが、ミにかく久太郎から僕は太田平八郎の講談を書かないかミ相談を受けたことがあつた。それが何かの間に合はなくて『野良犬』ミいふ短篇小説を書いて送つたが、それが載つて間もなく、新聞は其後一回出たかと思ふが廢刊した。そして之れもウロ覺えたが、其の出版法違反か何かで、久太ミ久板君が牢屋に行くことになり、大杉君は野枝さんミ魔子ちゃんの人で田端の方へ引越したと思ふ。其の間に例の

に初めて公然ミ社會主義者ミされて終つて、内藤新宿警察署に、これも生れて初めての檢束をされた。檢束の仲間は荒畑寒村尾崎士郎、神崎(弟の方)それに僕の四人だつたが、此の時は僕が一番長くて一週間おかれた。そして大杉君は悠々ミ大阪や

を見て歩いてゐたのだミいふことだ。それは後に北風會で大杉君から聞かされたことだ。僕等は太田君の此の民衆觀ミもいふべきものを加味した關西地方の

見聞記を聞かされて一様に喜んだ。

米騒動が終つてから一月ばかりして僕は『不平』ミいふ評論雜誌の記者になつた。そして初めの頃は主ミして訪問の方を受持つたので、殆んど毎日の様に電代ミ辨當代を貰つては、田端に閑居してゐる大杉君の家に油を賣りに出かけてゐた。サツバリしてゐる少しもブラないおまけに親切な大杉君が、馬鹿に僕の氣に入つて好きになつて終つたのだ。野枝さんミ當時は

仲がよかつた。よく三人で無駄口を叩き合つては笑つた。或日なんかは、野枝さんに自慢の歌澤を弾ひて貰つて、大杉君二人で聞いたことがある。おまけに其時は、酒を飲めない筈の大杉君が僕と野枝さんのお交際みたいにして湯呑で酒をナメたりなどした。併し大杉君は三味線が嫌ひださみえて、何か一言「言皮肉つた」思ふと忽ち野枝さんを怒らして終つた。

『駄目よ、この人は藝術なんかわかりやしないんだから……』野枝さんは苦笑しながら云つて三味線をしまつた。大杉君は皮肉さうにクスクス笑つてた。此の話は後に僕が、原稿料儲けに『女の世界』にヌツバヌツて、一寸野枝さんから叱られた。

當時の大杉君の經濟狀態は亦全くお話にならないほど逼迫してゐたらしい。けれど、大杉君は平氣だつた。いつも呑氣さうに魔子ちゃんのお守をしたり傍ら書冊を讀んでゐた。そして主として野枝さんが、其の生活費の心配に歩いてゐた様だ。電燈の點く頃他所からオペラバックを下けて歸つて来る野枝さん、留守居の大杉君との第一の話は、いつも金が出来た出来ないといふことだつた。それほど困つてゐたのだらう。けれどこんなに困る中から僕が五圓貰つた思出がある。それは何んでも米代を支拂ふ必要とそれから裁判所か何處かへ行くので、大杉君の下駄を買つたり帶の質受けなんかする必要に迫つた金だつたと思ふ。一日中原稿を賣りに歩いた野枝さんの努力が無駄になつた或る夕方のことだ。其の日は一日中北風會の連中やら、信友會の連中それに僕などが遊びに來てゐたのだが、野枝さんが歸つて来るまでは無論晝飯も夕飯も食ふことが出来なかつた。そして野枝さんが歸つて來てから、其の頃大杉君の家にこまりに來てゐた大杉君の妹さん（名前は忘れたが男の兒を連れてゐた）の指輪を質に入れて來たのもう一つそれはさうして拵へたのか知らないがとにかく、野枝さんの手には合せて十二圓の金があつた。其の中の五圓を僕が貰つたのだ。其の時分の僕の生活も随分ひきかつた。三十圓の月給のほかに原稿料やら外出手當を貰つたつて五十圓にはならなかつたのだ。そして其の當時僕にはもう子供が二人あつたのだ。其の五圓は何んでも僕のワイフが近々第三人目の兒を生むといふ時だつたので、大杉君が同情してくれたんだと覺えてゐる。僕は『そんなことをしては亦明日からこつちが困るじゃないか』と言つて遠慮したんだが、大杉君は『こつちはさうにかなる』と言つた。『細君に温かいものでも買つてやるさ、途中で使つて終つてはいけなせ……』といつもの調子で笑つてゐた。そして残りの金で、其晩皆にすしを取つたり酒を買つたりしておごつて了つた。これには僕は深く感激させられた。

また大杉君の面白さは、こんなに貧乏な生活をしてゐても、いつも餘裕のあることだ、悠暢迫らざるところが好い。こんなにひきく困つてゐるのに、（深いイキサツの話は忘れて終つたが）とにかく近所から山羊を一匹買ひ込んだ。此の山羊は牝で乳が澤山に出たが、乳を搾る時にはいつも悲しさうな聲を出して啼く。ところが大杉君のころは貧乏だ。だから僕はよく腹を空らしてこの山羊の乳を搾つてもらつて飲んだ。其頃大杉君の家には大杉夫妻と魔子ちゃん、大杉君の妹さんとその男の兒と大杉君の弟の進君がゐて、いつも進君が乳搾りの役を勤めて呉れた。この山羊に就いて一度困つた事があつた。いつだつたか大杉君も野枝さんも進君も皆留守で、妹さん二人きりの時だつた。例によつて腹が空いて來たので乳を搾らうと相談が纏つた。そこでバケツに湯を持つて來て布で乳を温めながら搾るのが妹さんの役、山羊の兩方の角を抑へて山羊が動かない様にするのが僕の役と決つたのだが、それが僕には可なり苦痛だつた。モウ……山羊の啼く様な聲を立て、頭を振られたり、兩肢を動かされる、僕はもう堪らなかつた。力一杯角を握つて、兩肢を膝の上に乘せてゐるんだが、山羊先生も一生懸命に暴力を振るほうとすると、僕は氣味が悪くなつて終つて、さうさういつもの三分一ほども搾れなかつた。

それから、大杉君が獄中記を『新小説』に執筆しかけたのもこの頃だ。其の當時大杉君の原稿は何處でも政府當局者を恐れて買ひ手が無かつた様だ。それで獄中記なども大杉君は餘り氣がしてゐないらしく、『新小説』から頼まれて、いや／＼書いてゐた様に思ふ。最初は『此頃はこんなものを書いてゐるんだ、さうだ面白からう』などいって僕に原稿を讀んで聞かせたりしてゐたが、それから二三日して行くに『もうあの原稿はやめた、何か書いて呉れといふから書きかけたんだがこゝが悪い、あすこを消して呉れなせよ、いやにびく／＼しやあがるから、もうお断りだ。これを歸りに投げ込んでくれたまへ！』といつて斷りを書いたハガキを僕にたのんだことがあつた。そして無論僕はそのハガキをポストに投げ込んで置いたんだがそれでも後になつて、さう話が付いたんだが、單行本でも出るし、評判も善いし、よく賣れた。

又不思議なことには、大杉君の原稿は、一時恐ろしがつて誰れも買手が無かつたのに、この『獄中記』が評判を取つた頃からさうぞろぞろ賣れ出した。

その後間もなく、この田端の家は隣りの工場から火を發して焼けてしまつた。そして大杉君は瀧の川の方へ、以前の長屋住居からみれば、馬鹿に大きな家に移轉した。こゝへも僕はちよい／＼遊びに行つたが、前ほさには繁くなかつた。

大杉君のこと

五十里幸太

彼は非常に負けず嫌いの強情張りであつた。彼の残した我が國勞働運動に對する功績も、彼が數多の戰友から離れられた損傷も、主として彼のこの性格が原因したやうに思はれる。然し十年も前のことを思ふに最近では、かなり彼も折れて來たらしい。彼は極く少してはあるが羞かみ屋であつたが、それを例の剛情で押し隠さうとしてゐることがよくあつた。

彼は親切な男であつた。滿洲で客死した荒川義英が病氣で困つてゐた時などは、衣類を質入れして金を工面してやつたことを覚えてゐる。

彼は茶目であつた。彼がよく口にした「理性と感情とは一緒だ」といふこと、同じやうに、彼には惡戯と本當との境界線が無いのかと思はれるやうなことが應々あつた。大して當て嵌つてはゐないが彼はその著書『惡戯』の序文の中で言つてゐる。

「惡戯のなかに本氣を出してくれ」と。

彼は無鐵砲で『太く短く』世渡りをしようとする傾向があつた。

彼が運動に對する時金を借りる時に拘らず、さうであつた。これを償ふ爲めに、彼は伶俐と細心さを持つてゐた。それは彼の計畫とその實行を見る時に感じられたことだ。

彼は人を惹きつける魅力を持つてゐた。女子供をあやす優しい技巧の持主でもあつた。それは彼の人なつこい人格と眼と吃つた甘い言葉との賜であつた。

おかしな言ひ方ではあるが、彼の一貫した思想——同時に感情、は大體に於いて『反逆精神』であるを見て差支へないであらう。彼は最初秋水、枯川等の影響を受け、それからクロボトキン、バクウニン等を憧憬し、佛蘭西に行つてから、マフ

ノに興味を持ち出した。この間にも彼は多くの先輩に就いて研究したことは勿論である。僕は彼にマルクスの事も聞いた、ラサール、ブルードン、エンゲルス、ベルグソン、ソレル、スチルネル等々に就いて聞かされた。彼はそれ等の長所を自分のものにしなければいけないと言つてゐた。それで今では彼の思想はアナルコ、シンジカリズムだと言はれてゐる。

彼は昔はハイカラな青年であつたと言ひ聞いてゐる。僕が知つてからはいつも筒袖の着物を着てゐた。その筒袖の彼にもおしやれの點が見出せないでは無かつた。彼は仲間からは随分贅澤だと思はれた。それは彼が金錢に對して明日を考へなかつたからで、その反動として一錢も無いといふやうなことが度々あつた。尤も彼は『なあに、なんまかなるさ』といふ氣持は持つてゐたが。

彼は酒は一杯も行けなかつた。彼は甘黨だつた。ある宴會で寒村と二人が盃の底につく程の酒を甜めたばかりで非常に泥酔して『禁酒しよう』と互に言ひ替したといふ滑稽な話もあつた位だ。僕が彼の初めて半杯位のビールを飲むのを見たのは、藝術俱樂部で講演會あつた當時、牛込神樂坂のカフェーであつた。彼が野枝さんと菊富士ホテルに居た時分は、よく僕に羊羹の土産を催促したものだ。彼は魚よりも肉が好きだつた。しやれた果物と落花生、駄菓子を好んだ事を未だに覚えてゐる。彼が葡萄酒の口釋を言ひ出したのは佛蘭西から歸つてのことだ。彼の嗜好品として忘れてはならないものが未だあつた。それは女子供だ。彼と僕と妹と三人で歌舞伎座へ行つたことがあるが、唯『綺麗だね』といふだけだつた。

最後に實際運動方面の彼については、彼の残した一句を左に轉載するだけに止めて置く。『勞働階級の解放は彼等自身によつて爲されなければならぬ。』